



Title	今昔物語集と日本霊異記との関係
Author(s)	山根, 賢吉
Citation	語文. 1960, 23, p. 15-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68542
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

今昔物語集と日本靈異記との関係

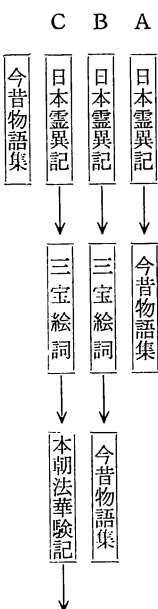
山 根 賢 吉

を十分には示しておられないように思うのである。

とは言え、これら先学の諸説はおおむね妥当という外はないのであって、兩説話集に同一内容の説話があると、その殆どの場合には直接関係があるものと考えていい。しかしそれはあくまで「殆どの場合」であって、「すべての場合」ではない。たとえ少数ではあってもいくつかの例外がある。こゝでは主としてその例外について考えてみよう。妥当なるものについては単に表示するにとどめたい。

二

私見によれば、兩説話集の関係は大別して次の三つになる。



すなわち、今昔所収の説話の中には直接靈異記によったもの(A)と、源は靈異記にありながら他の説話集(三宝絵あるいは法華驗記)によって書かれたもの(B・C)があると考えられる。従来は

一

周知のように今昔物語集には日本靈異記を出典とする説話がかなり含まれている。古くは岡本保孝の「今昔物語出典攷」に今昔の一出典として靈異記をあげている。しかしそこには見落しもあり、類話としか言えないものまで併記している。従って、今昔のどの説話が直接靈異記によって書かれているのかという問題になると判然としない。こうしたことは程度の差はあっても、明治以降の先学の諸説についても言うことが出来るように思う。

すなわち、芳賀矢一博士の「攷證今昔物語集」については、嘗て益田勝実氏が指摘されたように、その「本朝の部になると単に内容の共通な説話なのか、兄弟関係か、親子関係か、説話の伝播系統を詳細に見きわめずに参考文献を羅列したきらいがあり」(註1)、島津久基博士の「今昔物語集」(大日本文庫)、長野晋一氏の「今昔物語」(日本古典全書)、武田祐吉博士の「日本靈異記」(日本古典全書)などの頭註、板橋倫行氏の「日本靈異記」(角川文庫)の脚註、或は山田孝雄博士の「三宝絵詞の研究」(三宝絵略注所収)のうち今昔と靈異記について述べられた部分など、いずれも兩説話集の関係

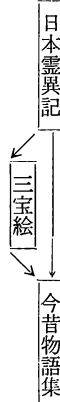
(各項目上の番号は便宜上筆者がつけたものである)

(22) (21)	(20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)	番 号
		今昔物語集
31 30	28 27 26 31 29 27 26 25 19 18 17 16 15 14 13 12 11 2 23 4	
中 下 の の 19 23	中 下 下 下 下 下 中 中 下 上 上 上 中 中 中 中 中 上 上 の の の の の の の の の の の の の の の の の の 18 20 18 1 10 6 6 15 11 33 35 32 28 25 22 39 26 31 5 22	日 本 靈 異 記
絵による。	但し前半のみ。後半は三宝	参
	但し一部分下の2による。	考
	(右同)	
	(右同)	
	(興福寺本日本靈異記)	

[illegible]

(72)	(71)	(70)	(69)	(68)	(67)	(66)	(65)	(64)	(63)	(62)	(61)	(60)	(59)	(58)	(57)	(56)	(55)	(54)	(53)	(52)
(卷26)	(卷24)	(卷23)																		
1	9	18	17	42	41	38	37	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	22	21	20
上の9	中の41	中の27	中の4	上の13	上の25	上の27	中の33	中の3	上の24	上の23	中の10	上の21	上の16	中の1	上の29	上の15	中の38	中の32	中の9	上の20

右の表のうち、(1)(20)は下欄に記したように、一部分は靈異記により、他の部分は靈異記以外のものによったと考えられるものである。(1)については、その前半の出典をつまびらかにしないが、後半の一部は三宝絵から、また一部は靈異記からとったものと考えられる。(20)の前半は靈異記に、後半は三宝絵によっているようである。しかもこれら三宝絵の説話は直接靈異記によって記されたものである。このことを簡単に示せば、



となる。従って今昔所収の(1)及び(20)の説話は、一部分は先にあげたAに、また他の一部分はBに属していることになる。今、便宜上Aに入れたに過ぎない。

(20)については問題がある。この説話の前半の一部と後半の一部には靈異記によったかと思われるふしがある。しかしその他の部分の出典は判明しない。松浦貞俊氏は「後になって此話が寺伝化されたものなどに準拠して書かれた結果であらうと想像する。『今昔』作者の改竄とのみは片づけられぬと思ふ」(註2)と述べておられる。とすれば、本説話全体が「寺伝化されたものなど」によっている可能性もある。下欄に「存疑」としたゆえんである。

以上によって、純粹にAに属するもの、すなわち今昔所収の説話中、靈異記のみによっているものを数えれば六十九話となる。

なお下欄に(興福寺本日本靈異記)とあるのは、現存靈異記の諸本中、興福寺本にのみ存する説話を意味する。これらが今昔の出典であることはすでに指摘されているところである(註3)が、前掲、島津博士、山田博士、長野氏等の著書にはこの点を見落しておられるように思う。

三

今昔物語集卷十四誦方廣經僧入海不死返來語第卅八の出典として「攷證今昔物語集」は

日本靈異記下卷沙門誦持方廣大乘沈海不溺緣第四

三宝絵卷中諾樂京僧

の二つをあげている。三宝絵の説話末には「靈異記ニ見ヘタリ」とあつて直接靈異記によっていることを示しているが、これは山田博士の言われるように靈異記下巻第四の抄訳である(註4)。そこで三宝絵は靈異記のどの部分を省略したかを調べてみると次のようである。(靈異記の本文は日本古典全書による)。

「名未詳也」「爲裝束」「懷嫌、而作是念」「舅不知猶平心而乞」「謨惡」「大徳溺流」「終溺沈」「無幸亡父、片圖失寶我別知之」「何更疑之」「奥國」「供養三寶」「展転乞食偶值法事」「受其供養」「彼惡事」「諸佛加護」「贊曰、美哉、不舉彼惡、猶能忍之、寔斯法師、鴻立忍辱高行。所以長阿含經云、以怨報怨、如草滅火、以慈報怨、如水滅火者、其斯謂歟矣」

一方、今昔の本説話を詳細に検討してみると右にあげた部分がすべて見当たらない。かかる事実は偶然の一致と言えるであらうか。これは今昔の本説話が三宝絵によっていることを示すものではないからうか。そこでこの三つの説話集の本文からそれぞれ一節ずつを抜き出してくらべてみよう。(今昔の本文は改訂増補國史大系に、三宝絵は観智院本による)。

今昔物語集	三 宝 絵	日本靈異記
娘此レヲ聞テ大 キニ泣キ悲デ云 ク。悲哉再ビ親 ノ白ヲ不レ見ズ 成ヌル事。我レ 何デ彼ノ海ノ底	娘是ヲキ、テ大 ニナク、悲哉。 二タビヲヤノカ ホミズナリヌル 事。我海ノ底ニ イキテ、ムナシ	其女聞之、 大哀哭言、 無幸亡父、 片圖失寶。 我別知之、 能見父儀、

ニ入テ空キ骸ヲ 見ムト。泣キ悲 ブ事无限シ。	キカバネヲダニ ミム。トナク。 寧視底玉、 亦得父骨、 哀哉痛哉。
------------------------------	---

靈異記の本文中傍線のところは、先にあげたように、三宝絵、今昔ともにない部分であるが、これを除外して考えても今昔の本文は靈異記よりも遙かに三宝絵に近い。同様のことは右に引いた部分以外に於ても言えるのであつて、この場合今昔は三宝絵によつたものと考えてよい。すなわち前記のBに属するのである。こうしたことは今昔物語集巻二十橘磐嶋路使不至冥途語第十九についても言える。「攷證今昔物語集」は出典として、

日本靈異記中卷閻羅王使鬼得所召人之路以免縁第廿四
三宝絵巻中橘磐嶋

をあげている。内容は三者殆ど一致しているけれども、まず地名・人名について次のような小さい差違が認められる。

(地名)	日本靈異記	三 宝 絵	今昔物語集
諸楽左京六条 五坊 大安寺之西里	奈良ノ左京六条五坊 大安寺西郷		奈良ノ京 大安寺ノ西ノ郷
越前之都魯鹿津 近江高嶋郡磯鹿辛前	越前國敦賀津 近江國高嶋郡(前田家本この下に「之浜」とある)		越前ノ國敦賀ノ津 近江ノ國高嶋ノ郡ノ浜

山代宇治橋	山城國宇治橋	山城ノ國宇治ノ橋
率川社	(ナシ)	(ナシ)

(人名)

日本靈異記	三宝絵	今昔物語集
磐磐嶋	橋磐嶋(但し東大寺切には「橋磐嶋」とある(註5))	橋ノ磐嶋
高佐麻呂	高佐丸	高佐丸
中智麻呂	仲智丸	仲智丸
槌麻呂	槌丸	津知丸

このように今昔及び三宝絵にはともに「率川社」がなく、主人公の名「橋磐嶋」が不思議に一致する。もっとも後者については、三宝絵東大寺切に「橋磐嶋」とあって問題は残るが、思うにこれは三宝絵書承の間に誤ったのではないか。その誤写を今昔はうけついでいるのではあるまいか。それはともあれ、国名の下に一々「國」の字を入れたり、「麻呂」を「丸」としている点なども両者の一致するところである。これはやはり今昔が三宝絵によった結果と考えていいのではないか。そこで三者の本文を比較してみると今昔は靈異記よりも三宝絵に近いことがわかる。一例をあげよう。

磐嶋ガ云ク。我レ道ニシテ控カムガ爲ニ楠少有り。此レヲ與テ令レ食ムト爲ルニ(今昔)

磐嶋ガ云、我ミチニテスカムトテ楠スコシモチタリ。ト云テコレヲアタヘテクハセツ(三宝絵)

磐嶋云、唯有干飯。與之令食(靈異記)

右の引用中傍線部は今昔と三宝絵とにあって靈異記には見えない。三者ともにある部分でも今昔の本文は三宝絵に近い。こうした事実が右の一例にとゞまらず各所に見られるのであって、今昔が三宝絵によったとして何等の不合理を生じない。従ってこれもまたBに属するものと言う外はない。

本説話については、すでに岩淵悦太郎氏が「この話の場合は今昔が三宝絵詞の文をも参考にした事是否定し得ない」(註6)と述べておられるが、私見によれば今昔は三宝絵のみによっているのであって、参考程度ではない。なお春日宣氏は、今昔卷廿について「靈異記と共通の廿二話は直接靈異記から採ったものと見て差支えないであらう。(中略)廿二もの数の中から二、三だけ三宝絵や略記から採ったと推定するのは卷廿に限ってはきり不当だと言える」(註7)と述べておられる。扶桑略記については全く同感であるが、三宝絵に関する限りこのお考えには賛同し得ない。

次に前節で一言した一部分Bに属する(1)と(2)の説話について簡単にふれておきたい。(1)は道照に関する説話であって、今昔は彼が新羅で法華経を講じた部分を三宝絵からとっている。このことはすでに国東文麿氏の指摘されたことであるから(註8)、再説を避けるが、出典となった三宝絵の説話末には「続日本紀、靈異記、居士小野仲伝が撰日本国ノ名僧伝等ニ見タリ」とある。仲広撰日本国名僧伝なる書が発見されない以上、三宝絵はどの程度靈異記によっているものか判明しないが、現存文献から判断すれば、道照の新羅に於ける記事は靈異記によっているものと言わざるを得ない。ちなみに続日本紀にはこれに相当するものがない。

(20)の説話、すなわち今昔卷十四第廿八話の出典として「攷證今昔物語集」は、

日本靈異記卷上些說法花経品之人而現口喝斜得惡報縁第十九

同書卷中些說法花経僧而現口喝探得惡死報縁第十八

三宝絵卷中山城国囲碁沙弥

をあげ、それ〴〵本文を引用した後

(日本法華驗記卷下 参閱)

としている。このうち靈異記卷上の十九、三宝絵卷中、法華驗記卷下の三説話は同一内容であって、靈異記卷中の十八だけが内容をやや異にする。今昔の本説話の前半は後者に属し、後半は前者に属している。従つて前半の部分が靈異記卷中の十八によつてゐることに問題はなないが、後半は靈異記卷上の十九・三宝絵・法華驗記のうち何れによつたかと言ふと、どうも三宝絵によつてゐるように思われる。例えば、

俗之レヲ聞テ若ヲ打ツ詞ニ穴恐シト云フ(今昔)

俗是ヲキ、テゴヲウツコトバニハ穴恐シミト云フ(三宝絵)

白衣聞之、甚慄恐曰畏恐矣(靈異記)

の一節は三宝絵に近似している。この部分は法華驗記には見えない。また今昔及び三宝絵には「医師」を呼んだことが見えているけれども、靈異記にはなく、法華驗記では「医師家」へ往くことになっている。こゝに於ても今昔は三宝絵に一致する。従つて今昔の本説話の後半は三宝絵によつたものと推定していいであらう。

なお今昔物語本朝部冒頭の説話が三宝絵卷中の聖徳太子の説話によつてゐることは山田博士が指摘された通りである(註9)。三宝絵の説話末には「日本記、平氏撰聖徳太子伝、上宮記、諸楽右京薬師

寺沙門景戒撰日本国現報善惡靈異記等ニ見タリ」とあり、靈異記を一出典としている。また今昔卷十一の第三、役行者の説話が三宝絵卷中所収のものによつてゐることも国東氏が述べられた(註10)。三宝絵の説話末には「続日本紀、靈異記、居士小野仲広が撰日本国ノ名僧伝等ニ見タリ」とある。以上二つをBに含めることも可能であらう。

四

最後に、Cに属するものは今昔卷十四美作国鐵堀入穴依法花力出穴語第九の場合のみである。これについてはかなり詳細な考証を用意してゐたのであるが、最近、山根对助氏が今昔の本説話の原典は法華驗記卷下の一〇八美作国採鉄男であることを示され(註11)、また法華驗記が直接三宝絵につながるものであることについては、以前私見を述べたことがあるので(註12)、こゝでは煩雑な考証は避けることにした。三宝絵が靈異記と直接関係のあることは言うまでもない。

五

以上述べたことは一つの調査報告あるいは一応の整理とでも言うべきものに過ぎない。たゞこゝで言いたかったことは、今昔、靈異記の両説話集に同一内容のものがあれば、それはすべて直接関係ありとする見方が一部には行われているようであり、そうした安易な見方は当然一度検討すべきものではないかということである。筆者は出来得る限り丹念に両説話集の本文を比較検討したつもりではあるが、なお再考すべき点もあらうかと思う。御叱正を願つてやまぬ。

- 註1 益田勝実氏「今昔物語の問題点」(日本文学第三卷七号)十四頁。
- 註2 松浦貞俊氏「日本靈異記」(統日本古典読本)一三九頁
- 註3 大屋徳城氏「興福寺本日本靈異記」解説六頁 雨宮尚治氏「日本靈異記について——古写本に関する報告——」(国語国文第四卷五号)七四頁等
- 註4 山田孝雄博士「三宝絵略注」一八六頁
- 註5 山田孝雄博士「三宝絵略注」一八一頁による。
- 註6 岩淵悦太郎氏「説話文学の用語」(解釈と鑑賞第六卷二号)四五頁
- 註7 春日宣氏「今昔物語卷廿論——特に靈異記説話との関連について——」(日本文学論究第十七冊)六二頁
- 註8 国東文麿氏「今昔物語集と扶桑略記」(国文学研究第十六輯)六〇頁
- 註9 前掲書一八八頁。四六三、四頁
- 註10 前掲論考 五九頁
- 註11 山根対助氏「大日本法華驗記の今昔的屈折(上)」(国語国文研究第十四号)七二頁
- 註12 拙稿「日本靈異記と本朝法華驗記」(語文第十九輯)二八頁